

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。
今回は長良川源流の高鷲村から
開拓の歴史を中心に特集します。
また昭和の治水事業、
木曽川下流増補事業を紹介しします。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記〔高鷲村〕

緑燃ゆる長良川源流の高鷲村。
その歴史はまさに自然との闘いの日々。

AREA REPORT

「乳と蜜のあふれる里」をスローガンに、
開拓という難事業に挑んだ高鷲村の開拓史。

気ままにJOURNEY

緑の風がかけぬける、花と緑のファンタジーランド

歴史ドキュメント

木曽川下流増補事業、その背景

TALK&TALK

木曽川下流域の景観

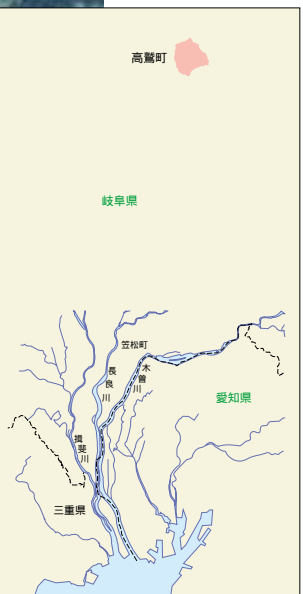
民話の小箱

郡上谷

緑燃ゆる長良川源流の高鷲村。その歴史はまさに自然との闘いの日々。

八割以上を山林が占める高鷲村は、長良川源流の村。今では美しい山村も、かつては過酷な宿命を背負っていた。雪で閉ざされる冬、狭く急な耕地。

「限られた土地には限られた人間しか住めない」この厳しい自然環境を乗り越えるため、人々は血のにじむような苦勞を重ねてきた。しかし、その自然環境は大切な財産に。「農業と観光の高鷲村」へと成長を遂げています。



高鷲村の航空写真

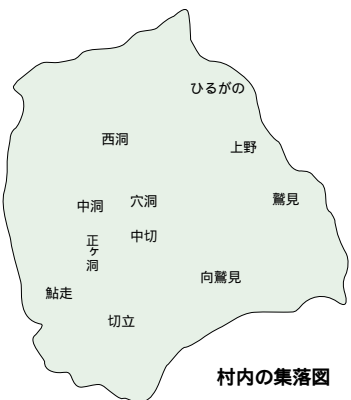
長良川源流の村・高鷲

伊勢湾に注ぐ延長一六六kmの大河、長良川。その最上流部にあるのが岐阜県郡上市高鷲村です。西には大日ヶ岳（標高一七〇九m）東には鷲ヶ岳（標高一六七二m）がそびえ、両峰の間にはひろがる高原や上野高原、切立高原などの広大な高原が開けています。ひろがる高原には太平洋に流れる長良川と日本海に流れる庄川が間近に見られる分水嶺公園があります。

この一帯は日本列島の背骨である白土連峰にもつながっており、わが国多数の多雨地帯、大日ヶ岳に源を発する長良川は、鷲ヶ岳方面から流れる鷲見川、切立川など二四本もの溪流が流れ込んでいます。

奥美濃に位置する高鷲村は、かつての美濃国と飛騨国の国境。村の八二%を山林が占め耕地は六%にしか過ぎませんでした。

村の誕生は明治二〇年。当時の「貼立村」大鷲村、鷲見村、西洞村の四ヶ村が合併して、現在の村域が確定しました。そこで紛糾したのが村の名です。現代のように公算という方法もない時代、村寄合で話し合いを重ねた上、「高鷲村」の名が決定されました。名のゆえには、「鷲退治にちなんだ地名が村内に数多く点在する」と、「美濃の最北端の高所だ」といって、「高鷲村」が生まれました。

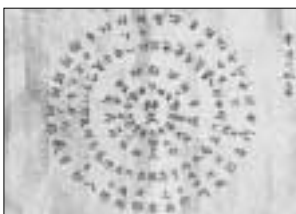


村内の集落図

宝暦の郡上一揆

宝暦年間（一七五二～一七五五）郡上藩全体を揺さぶった郡上一揆は、この地にも深刻な影響を与えました。時に九代将軍家重の治世下、賄賂は公然と行われ、一方で財政は極度に苦しくなっていました。郡上藩主金森頼綱も同様、文事を楽しみ風流を好む一方、賄賂が横行するなど綱紀は乱れ、財政圧迫に陥っていたのでした。

もともと飛騨一國を領有していた名門金森氏は、元禄十年、羽州より郡上藩に移封。山林資源豊かな飛騨とは異なり、収入源の乏しい郡上藩での財政事情は、過酷な年貢の取立を引き起こしていったのでしよう。鷲見八ヶ村はすべて一揆に加勢する村々であり、宝暦五年（一七五五）一揆の頭取方が盟約した唐傘連判状には、向鷲見の弥十郎・五郎作と切立村の喜四郎が署名しています。喜四郎は同年、老中酒井忠尚に対する籠闘訴に加わって入牢し、そのまま牢死。弥十郎は、同八年（一七五八）江戸の目安箱（箱詰）に加わり、一揆の勝利を決しましたが、その罪を問われ死罪。農民の生死をかけた熾烈な戦いは、多くの犠牲者を出しながらも、ついに勝利を収め、名門金森家は断絶されました。この背景にある「限られた土地には限られた人間しか生きられない」。これは山村ならではの過酷な宿命。貧困と飢餓のあげくの一揆の勃発でした。



からかさ連判状の写部分（筆頭がわからないように工夫したもの）

お立山と造林事業

お立山は藩主直轄の領地のごとく、鷲見郷には、切立の中山、向鷲見村の住屋、中切村の猪ヶ洞の三ヶ所がありました。これは江戸初期の城郭や城下町形成にあたって整備されたもの。しかし、江戸全期にわたって郡上藩政における林業はきわめて消極的であり、特筆すべき施策は見当たりません。これが、飛騨の美林と一線

を画す原因なのでしよう。しかも、郡上藩による「長寿木の制」は、自分の持ち山でも、目立つような木は代探できない、と定めています。したがって、造林意欲は無論のこと、持ち山にても大きな木を嫌う傾向さえあったとか。こうした無策ぶりが、郡上藩で造林事業がふるわなかった原因の大きなものといえましよう。広大な山林を有しながら財源として活用できなかった高鷲村は、貧困にあえぎながら明治という時代を迎えました。

三つの白いダイヤ

高鷲村には、「三つの白いダイヤ」とも、「三白産業」とも呼ばれる暴幹産業があります。スキー、大根、牛乳です。しかし、それぞれをダイヤと呼ぶまでには、血のにじむような苦勞がありました。

そもそも高鷲村は八〇%以上が山林で、わずかな耕地も狭く傾斜地にあることから、水田には適さない土地柄。古来から焼き畑農業が主流で、新田開発は江戸時代から始められました。それに伴って、正ヶ洞用水なども開削されましたが、台地に切り開かれた田畑は集落から掛け離れた場所であり、日々の農作業もままならぬ有様。せつかくの収穫物も鳥や獣に食い荒らされる惨状でした。

明治時代以降も開墾は実施されてきましたが、本格的な事業は第二次世界大戦以降、昭和一九年には初めて大根を出荷できるまでになりました。しかし、当時道路は整備されておらず、せつかくの大根も漬物に加工して出荷。売上高は生産量に及ぶことがありませんでした。その後、国道一五六号をはじめとした道路網の整備が進むとともに生産者の努力で、「ひるがの大根」の地位を不動のものにしました。

酪農は昭和一九年、一頭の子牛から始まりました。しかし鮮度が命綱の牛乳のこと。交通網の不整備から当



ひるがの高原大根



分水嶺公園

巨石が物語る古代の姿

高鷲の地に人々が住み始めたのは縄文時代。今から五千年ほど前のことです。村内にはさまざまな史跡や不思議な遺跡が残されています。鷲ヶ岳の山麓深く、通称ワサビ沢近くにある「立石」は、うっそうと茂る杉林の中、天に向かってそびえる巨石。村人は昔も今も山の神様として崇拝しています。また、鷲ヶ岳ヶ高原ゴルフ倶楽部近くの林には、「珍石」が残されています。これは、男性のシンボルをイメージさせるもので、古代人の作という説も。清らかな谷川と日当たりのよい南向きの斜面に恵まれたこの地は、太古の人類の居住条件を満たした地。清流に棲む魚や山々を飛びかう鳥たちを日々の糧に、人々が移り住んできたのでしよう。村内からは縄文遺跡が四ヶ所発見されています。

鷲見氏と向鷲見城

平安時代中期、この地は「貼立・切立・正ヶ洞・向鷲見・中切・穴洞・鷲見・西洞」の



東海北陸随一のスキーエリア

初は捨てること。大根と同様道路の整備につれて成長を遂げ、「ひるがの高原牛乳」はコクのあるおいしいと定評です。しかし、過当競争や農産物の自由化などの課題も多く、加工品の開発とともに新たな販売ルートも開拓中です。山村・高鷲が豊かな村へ変貌するきっかけは、観光・レジャーへの着目でした。国道一五六号の間近に迫る山麓は、スキーゲレンデの最適地。昭和三九年にオープンしたひるがの高原スキー場が口火となって、鷲ヶ岳スキー場、ダイナランド（当初は大日ヶ岳スキー場）、郡上高原スキー場、ホワイトヒアたかすが次々と開設され、東海北陸でも有数のスキー場に発展しました。また、夏には、ゴルフ場、キャンプ場、テニスコート、別荘など、多くの観光客でにぎわいをみせています。「夏は涼しく、冬は寒さが厳しい」という人々を苦しめてきた自然環境は、今ではかけがえない財産に。「山の村」から「開拓の村」そして現在には、「農業と観光の高鷲村」へと発展を遂げています。

村制百周年を記念して

平成九年、村制一〇〇周年を迎えた高鷲村では、さまざまな記念事業が開催されています。中でも、「木曾馬道中膝栗毛」はひととき注目を集めたイベント。高鷲村から東京都の馬事公苑までの約五〇〇kmを五月二五日から六月六日までの一三日間にわたって、木曾馬キヤラパンが実施されました。そもそも木曾馬とは、日本古来からの在来馬。岐阜県や長野県の厳しい山間地を中心に戦前まで多数飼育されてきました。厳しい自然環境に適応した木曾馬は、極めて強健で粗食に耐え、性質も温順で賢く、農業に欠かせない存在でした。しかし、サラブレッドの輸入や戦後の機械化で激減し、絶滅の危機に瀕しています。



珍石

八つの集落を合わせ、鷲見郷と呼ばれていました。ここに藤原北家房前流の藤原頼保が土着して、鷲見氏と名乗ったといわれています。平家全盛の当時、これに反抗した藤原成親が断罪に処せられるなど、まさに藤原家は不遇の時代。藤原一族が源氏再興の機運に乗り、これに通じたのは当然の帰結といえましよう。鷲見郷で最初に地頭職に任命されたのは、鷲見氏です。以来、一六世紀にいたるまで、鷲見一族はこの地の実権を握るようになります。この鷲見頼保には高鷲村土着にいたる鷲狩りの伝説が残されています。朝廷の命により鷲ヶ岳に住む大鷲二羽を無事しとめ、その賞として鷲見郷を賜ったのだとか。頼保は郡上太郎という郡名を称し、向鷲見城を築いて本拠としています。孫の家保は、承久の乱の戦功により本領を安堵されています。その一方、承久の乱の後、郡上郡南部は千葉氏の一族、東胤行が地頭職に。ここに中世郡上郡の基本的構図である鷲見・東二氏並立の時代が始まったのでした。



郡上の名門・鷲見氏滅亡は、天正三年（一五七五）のこと。金森氏に攻略され、その末裔は各地に分散したといわれています。江戸時代、この地は郡上藩の支配下に置かれました。

高鷲村では昭和五七年に岐阜市から一頭の木曾馬の寄贈を受けて以来、一四頭まで繁殖することに成功。木曾馬の保護・保存を訴えることも目標にキヤラパンは実施されました。この他、高鷲村では美しい自然を守りながら「親しみやすさき、うるおいと活気あふれる村」づくりをめざして、さまざまな事業を進めています。

参考文献
「高鷲村史」
「わたしたちの村たかす」
「高鷲村一九九三村勢要覧」
「ふる里高鷲」以上高鷲村発行

村有林の永代禁伐

昭和五年、高鷲村は村有林永代禁伐条例を制定し、村有林の保全を図ることにしました。これは、高鷲村が長良川上流に位置しているため、従来の基本的財産の財産よりも広域的な立場から水源涵養を主目的としたもの。治山治水の考えを基本に、長良川流域全体を水害から守り水資源を確保するための条例で、特色ある行政として他の市町村から注目されました。「造林記念碑」はこの条例を記念した石碑で、同年、桑ヶ洞に建てられました。



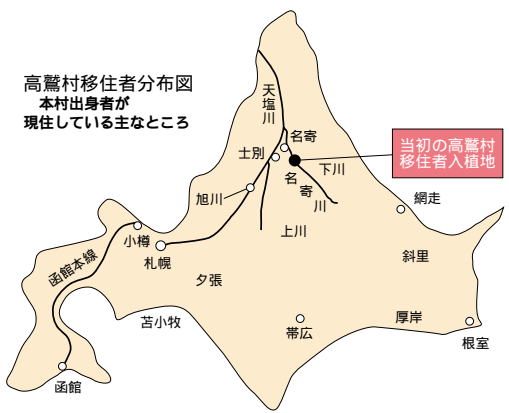
桑ヶ洞村有林禁伐記念碑

「乳と蜜のあふれる里」をスローガンに。開拓という難事業に挑んだ高鷲村の開拓史。



白山をバックに蛙ヶ野高原での放牧風景

急峻な山々に抱かれた高鷲村は、江戸時代になっても自給自足すら苦しく、米の反収も約三俵前後、その大部分を郡上藩主に納めており、農民一揆も相次ぎました。江戸後期には藩財政の収入確保のため新田の開墾奨励が積極的に行われ、田代新田・庄会新田・築島新田・恵里見新田・折立新田・切添新田が開墾されました。中でも寛文年間（一六六一―一七二一）に開墾された田代新田は、お助け普請によるもの。一定の歳下（無税）年限を与えて奨励し、失業救済にも大いに役立ちました。



高鷲村移住者分布図
本村出身者が
現住している主なところ

戸、切立二七戸をはじめ合計三二四戸にも及ぶ農家が移住し、その大部分が拳家移民となっています。

ちなみに、明治三四年四月に結成された鷲見の約三〇戸の移住団は、下川郡の名寄へ入植。当時、開通したばかりの鉄道・宗谷本線を利用して向かっています。そこからは国道を徒歩で名寄へ向かっています。しかし、国道とは名ばかりの刈り分け道のこと、木の根、草の根がはびこる湿地での道中、難渋を窮めたとか、むろんこの道行は、婦女子にはままならず、土別に残っていた婦女子は荷物とともに天塩川を下り、さらに名寄川を遊べてその後は徒歩でようやく名寄までたどりついています。当時、丸木舟は唯一の交通機関、日々の買い物は遠く土別まで足を運ばなければなりませんでした。

キヒなどが割りあ
いよく実り、苦勞
は報われたように
みえましたが、そ
の実、熊や野ね
ずみの食害で相当
の被害を受けてい
ます。
このように、北
海道移民は高鷲村
の歴史に暗い影を
落としています
が、一方で、北海道の開拓史に輝く光を投げかけているのも事実、道北の上川郡下川町に残されている「藤原池」はその代表例といえます。この池の開拓者は高鷲村の移民藤原米蔵。二〇年以上の歳月をかけて開拓しました。藤原池はこの一帯の水田づくりを可能にした栄光の池、苦勞の末の開拓は、北海道の大地に大きな実りをもたらしました。



藤原の池（藤原米蔵が手堀りした池）

食料確保をめざした満州開拓団

昭和二年、高鷲村は更生計画村に指定され、農政再編成を折り込み耕地の拡張について検討されました。しかし、開墾最適地はあるものの、灌漑用水に乏しいことから、計画半ばで断念。満州開拓に進出することとなりました。満州開拓は戦前の日本の国策、当時の総戸数七〇〇戸のうち、二〇〇戸を満州に移し、人口の調整に伴う食糧問題解決を図ることになりました。

先遣隊二二戸は昭和十五年、大鷲白山神社に集合、本事業の無事達成を祈願し村民多数の声援に送られて、懐かしい故郷を後に、第

江戸時代から村の主要産業として発展してきた山地養蚕は、明治中期をピークに次第に衰退していきました。ただでさえ自給自足がままならぬ高鷲村のこと、村内経済は困窮を極めました。この要因に加え、村内の残存可耕地がやせ地などの理由から、多くの村人は北海道に移住しています。
当時の新政府は北海道対策を重視、明治一年には北海道開拓使を置き、七年には屯田兵制度を設けています。これは、北海道の未開拓地の開発と日本の北辺防備を目的としたもので、高鷲村からも屯田兵に応募した者が若干いたと考えられています。
村の除籍簿から移民状態を見ると、移民は明治九年から始まり、同三八年から四二年をピークとして大正七年までの三三年間にわたっており、その間、鷲見七六戸、鮎走六六

ちなみに、明治三四年四月に結成された鷲見の約三〇戸の移住団は、下川郡の名寄へ入植。当時、開通したばかりの鉄道・宗谷本線を利用して向かっています。そこからは国道を徒歩で名寄へ向かっています。しかし、国道とは名ばかりの刈り分け道のこと、木の根、草の根がはびこる湿地での道中、難渋を窮めたとか、むろんこの道行は、婦女子にはままならず、土別に残っていた婦女子は荷物とともに天塩川を下り、さらに名寄川を遊べてその後は徒歩でようやく名寄までたどりついています。当時、丸木舟は唯一の交通機関、日々の買い物は遠く土別まで足を運ばなければなりませんでした。

満州開拓が始された昭和十五年、ほとんどが離農していたひるがのでも開拓を実施、郡上郡青年団の支場として大日道場が開設され、約六〇haの土地で研修を兼ねながら酪農

戦時下の村内開拓



昭和23年設立の大日開拓農協

昭和二年八月二五日の敗戦により、国内は未曾有の混乱に陥りました。国ではまず食料増産によって国民の極度の飢餓状態を救い、多数の従軍復員者・在外引揚者などの生活安定を図るために十一月、緊急開拓実施要領を制定する一方、占領軍の半ば命令により、次々と国内開拓を推進するための諸法令を制定しました。
岐阜県内においても約二万haの開拓地を選定し、高鷲村に対してはひるがの・上野・切

大鷲砂防ダム魚道

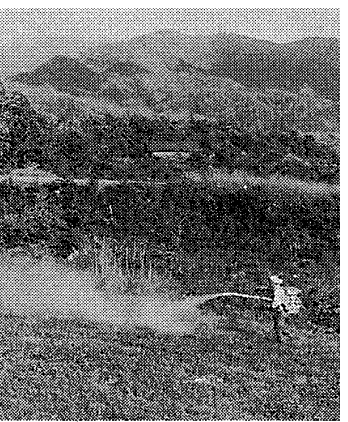
大鷲砂防ダムは水資源豊かな長良川最上流部に、昭和三八年に造られた本川で唯一の既設砂防ダムです。このダムは約一〇mの有効落差があるため、今まで魚の遡上をさまたげてきましたが、今で魚の遡上をさまたげてきました。魚がのぼりやすい川つくり推進モデル事業に長良川がモデル河川として指定されたのにもない、総延長一九〇m、一部橋梁を含む一回スイッチバック構造の階段式魚道は平成七年に完成しました。

先遣隊入植記念（昭和15年4月3日 大鷲白山神社にて）



中央を東満鉄道や国道が貫通する交通至便な土地柄でした。日本人の経営する店舗もあり、物資に不自由はなく、軍隊、警察隊の配備が充分なため治安も安全、気候は北海道とほぼ同様ですが晩秋期に雨量が少なく、厳寒期には零下二〇度を記録、耕地は主として水田で用水は環春川を二〇km上流で取り入れていました。

二の故郷を打ち立てるべく悲壮な覚悟で満州東部の環春県へ向かったのです。翌年には続いて本隊を送り、ほぼ入植予定を完了しました。環春は東はソ連に接し西南は川を隔てて朝鮮に接する広大な平野。中に



上野開拓風景

に乗り出しました。その一方、太平洋戦争が激しくなるにつれて、全国各地で食糧増産が強力に推進されました。特に馬鈴薯の種子は従来、北海道から移入されていましたが、戦局激化にともない津軽海峡がいつ閉鎖されるかという危機に直面したため、愛知・岐阜・三重の三県は、馬鈴薯の種子を自給することとなりました。その採種は場としてひるがの

では、前記大日道場の用地を中心に約八ha、上野で約六ha、切立上野で約三haが、各地からの農兵隊（食料増産隊）、県内の学徒、郡内各町村の住民などの動員により開墾されました。しかし、この緊急事業もすべて手作業であり、農作もやせ地に少量の肥料のみでまったく効果が上がらず、生産も種子の三倍弱に過ぎませんでした。

大日開拓団結成

昭和二年八月二五日の敗戦により、国内は未曾有の混乱に陥りました。国ではまず食料増産によって国民の極度の飢餓状態を救い、多数の従軍復員者・在外引揚者などの生活安定を図るために十一月、緊急開拓実施要領を制定する一方、占領軍の半ば命令により、次々と国内開拓を推進するための諸法令を制定しました。

ひるがの地区では入植地五〇八haに各種復員戦災者や満州環春開拓者など七二戸が入植し大日開拓団を結成、上野地区の四四〇haに鷲見地区の二・三男を中心に五〇戸が入植し上野開拓団を、切立地区三三〇haには二〇数戸が入植し切立開拓団を結成し、當農にあたりました。
「乳と蜜のあふれる里」は、大日開拓団のスローガン。開拓団の結団式で山下団長は理想郷建設に向けてこう述べています。「このひるがのから一人も飢える者は出さない。そのかわり、一人の千万長者もつくってはならぬ。この言葉こそ開拓の理念。開墾・當農・道路・溜池・水路・住宅・共同施設・資金の調達と償還など、當農確立へ向けてさまざまな努力が払われました。しかし、当初は人力開墾のみで遅々として進まず、幾度か経営不振地区として指摘されるほどの惨状、特に立地条件が悪ま

大鷲砂防ダム

大鷲砂防ダムは水資源豊かな長良川最上流部に、昭和三八年に造られた本川で唯一の既設砂防ダムです。このダムは約一〇mの有効落差があるため、今まで魚の遡上をさまたげてきましたが、今で魚の遡上をさまたげてきました。魚がのぼりやすい川つくり推進モデル事業に長良川がモデル河川として指定されたのにもない、総延長一九〇m、一部橋梁を含む一回スイッチバック構造の階段式魚道は平成七年に完成しました。

緑の風がかけぬける、花と緑のファンタジーランド

きらめく川面に釣り糸をたれる大公望。深緑に燃える山脈。悠々の大地は、今、花の饗宴。きらめく夏の陽ざしに負けないくらい、美しい輝きに満ちあふれる。そう、ここは花と緑のファンタジーランド。あでやかに季節の舞台を染めあげている。



牧歌の里

水の旅はここから始まる

三月、四日にオープンしたばかりの宮・木曾川インターチェンジから東海北陸自動車道を利用して約40分、郡上八幡インターチェンジから国道一五六号へ針路を向けると、緑の樹海が出現してきます。透明な風が吹きぬける高原、息をのむような渓谷や滝、季節の移ろいとともに鮮やかに衣裳がえする樹林。大日ヶ岳と鷲ヶ岳、二つの山に囲まれた高鷲村は、素顔の自然に出会う村。紫のじゅうたんを敷きつめたランタナ畑は、今が旬とばかりに美しさを咲き誇らせています。長良川の娘発駅は大日ヶ岳、国道一五六号から分水嶺公園の手前を抜け、車で十分ほど走ると「長良川源流」と刻まれた碑が建っています。この碑のすぐそばを流れているのが吹谷。この沢をさらにさかのぼること三、四時間、ぬかるんだ険しい道を踏み分けて登りつめる、長良川の源流に行き着くことができます。

かの天下の清流もその始まりは水の滴。一滴の水は山ひたを潤し、無数のせせらぎを集めてやがて海へ。長良川源流の水の営みは、高鷲の豊かな自然のシンボルともいえましよう。しかし、この吹谷の沢のほりは、山男でも顔に汗する厳しい道程。

お出かけ前には相応の準備と心構えをお忘れなく、ふきたす汗と筋肉痛という代償を払っても、余りある感動をお約束します。



長良川源流の碑

大公望を魅了する清流の魚たち

吹谷に限らず長良川最上流の水は、しばらく手を入れておくとびれてしまふほど冷たく澄んでいます。こんな冷たい清流を好む魚は、イワナやアマゴ、カジカなど、イモリに似たハコネサンシヨウオオ、水の中を上手に泳ぐカワネスムなども見かけることができます。

アマゴ釣り大会



このうち釣りファンの人気を二分しているのが、春のアマゴと夏のアマゴ釣りです。アマゴは村内のどこでも釣れますが、メッカといえば高鷲川や吹谷。ここには三〇〇を超える大物も珍しくありません。一方、アユの棲息範囲は意外と狭く、国道一五六号添いの六洞を過ぎた長良川本流の砂防ダムあたりまで。地名のこく、鮎走地区が釣りポイントの人気ベストワンだが、友釣りが解禁となる六月中旬には、全国から集まった大公望たちがきらめく川面に釣糸を垂れ、釣果を競いあっています。

純系種を守る木曾馬牧場

源流の碑からほど近いところに木曾馬牧場があります。スラリとしたサラブレッドとは違い、小柄ですぐぐり、胸が長く短足です。この木曾馬の祖は蒙古原馬、弥生時代から古墳時代に於いて現在の木曾馬はこの中型馬が朝鮮半島から渡ってきたといわれています。この蒙古原馬が他の馬と交配して日本に定住し、木曾の風土にあった

花と遊びのファンタジーランド「牧歌の里」

標高九〇〇m、花咲き村」とも呼ばれるひるがの高原に誕生した新しいスポットが「牧歌の里」です。そよ風、きらめく陽光草を食む牛やポニー、そしてヨーロッパを思わせる可愛らしい建物。牧歌の里は、まさしく花と遊びのファンタジーランドです。広大な敷地には「フラワーゾーン」「ハーブゾーン」「木ほつくりの森」「三牧場ゾーン」などがレイアウトされ、思っ存分、自然と親しむことができる体験型施設です。中でも、四万mもの広い花畑にはチユリリップ、ムスカリ、シバザクラ、クロリブカーネーション、コニマリ、ランダーなどさまざまな花が咲き乱れ、変わり行く季節を色あざ



さまざまな花模様が楽しめるフラワーゾーン



木曾馬牧場の乗馬体験

気ままにJOURNEY

木ほつくりの森
やかに彩ります。二、三牧歌の里ではランタナを育てるだけでなく、収穫してランタナオイルを抽出したり、ハーブ工房でポプリやドライフラワーの販売も行っていきます。また、ポニーや木曾馬などが放牧されている三牧場ゾーンでは、サラブレッドやセルワンスなどの調教された馬たちによる楽しいショーや乗馬体験も、ちびっ子たちに好評のふれあい牧場では、ウサギや羊たちとふれ合うことができます。ミルクハウスでは美味しいジャージー牛乳やソフトクリームも、ここならではの逸品です。他にも森の妖精たちと遊ぶ「木ほつくりの森」や「ファーム工房」など、楽しい魅力が盛りだくさん。高原を渡る風に抱かれて、じつと時間の過ぎるのを忘れてしまいたいそうです。



とってもかわいいジャージー牛

「可憐な花図鑑」ひるがの湿原植物園

ひるがの高原は広大な湿地帯だったところ。ここには氷河期を生き抜いた北方系植物が何種類も残る。生息しています。この地は天然の冷蔵庫。最後の氷河期が去ってから一万余年の間、ミネコケなどが低温のために腐敗されない堆積し、「泥炭層」となりました。泥炭層は深いところでは一・五mにも及び、これが北方系植物が生き残る土壌。ひるがの特有の自然環境をつくりだしているのです。そんな中でも、特に手つかずの自然が残される「二」畑を整備したのが湿原植物園です。園内には百種を超える高山性・湿原性の植物が自生し、春から秋にかけてカラフルな花々が湿



ハナショウブ

「湯の香たちこめる」湯の平温泉

原を彩ります。初夏から夏にかけての見ものは、ワタスゲです。その清楚な純白は高原に遊ぶ妖精のよう。スライソ科のヒツジグサは水面に白い花を浮かべて、ハナショウブやヤマアザサイは高貴な紫の花を咲かせます。たちこめる花の香りとまばゆい夏の太陽と、ここはまさに「可憐な花のユートピア」といえましよう。

牧歌の里や植物園で遊んだ後は、迷わず温泉へ。ひるがの高原の南寄り、国道一五六号から東へ入った大鷲地区に「湯の平温泉」があります。この温泉はかつて湯屋（温泉宿）があったと伝えられるところ。ではその伝説を「紹介」しましょう。

その昔、この地の川向こうには、評判の温泉宿がありました。さてある日、山伏の一行が一夜の宿を求めましたが、その日はあいにく満室。しかたなく主人が宿泊を断ると、山伏は怒ってこの温泉を大井田の岩の中に閉じ込めてしまいました。以来、その湯は大井田地区の地面にしみで、湯の平と呼ばれるようになった。



湯の平温泉

盆おどり

- 8月14日・15日・16日 -
むかしは、神社の拜殿で駒下駄をはき床を打ち鳴らして踊ったという盆おどり。そのために、高鷲ならではの軽快で独特のリズムがつくられたと伝えられています。華やかでショー的な要素こそありませんが、素朴でアップテンポな踊りは、まさに祭りの原点です。

白山神社秋まつり

- 9月16日 - 22日 -
まつりの見どころは、大名行列とへんべどり。大名行列は豊作への感謝と武士への憧れを示すものだとか。村内7つの白山神社で行われるが、なぎなた・やっこ・おかめなど、行列もさまざままで独自のあもしろさが楽しめます。また、へんべどりは悪魔退治のためのパフォーマンス。「へんべ」とは土地の方言で「へび」のこと。鼻高・道鬼とい・邪鬼・邪鬼と呼ばれる人物と獅子とのかけ合いからは目が離せません。



公共交通機関利用
名古屋から2時間30分(135km)
岐阜から1時間40分(100km)
高山から1時間25分(65km)
観光案内
高鷲村観光協会 0575-72-5000
高鷲村観光協会ひるがの支部 0575-73-2241(5月-9月下旬まで)
高鷲村FAX観光情報 0575-72-6611
ホームページアドレスhttp://www.takasu.org/

このように治水工事への要望は、当初は揖斐川のみに限られていましたが、昭和七年一月三日、名古屋土木事務所において、愛知・三重・岐阜三県の治水関係代表者が会合し、三県連合して、木曾・揖斐・長良三川増補工事期成同盟を設立し、その事務所を桑名市へ置くことを決定しています。

こうした運動は揖斐川のみならず、木曾三川増補へと発展したのです。期成同盟会では、愛知・三重両県は各関係町村及び団体毎に各一名、岐阜県は各輪中団体毎に三名以内

の委員を選出し、各方面へ陳情しています。次いで岐阜県会は同年二月二〇日に、木曾・揖斐・長良三川下流増補に関する意見書を可決し、愛知県郡部会でも同年二月三日に木曾川下流増補に関する意見書を可決し、それぞれ内務大臣に提出されました。

こうした幾度かの陳情を重ね、ようやく第三次治水計画に組み入れられ、昭和十一年五月の木曾川下流増補工事が議決され、昭和十一年から二〇箇年事業として施工されることとなりました。

木曾川では鍋田川分派点付近の狭窄部を引堤するとともに鍋田川を締切り、その分派点に越流堤を設けて、木曾川の洪水の一部を分流することとしました。

長良川では三重県立田村福原地内の輪中堤により本川が狭くなっていたため、輪中堤を引堤して河道の拡幅や堤防を拡築することとしました。

揖斐川では根尾川などからの土砂流出が著しく年々河床が上昇し、内水河川の自然排水が困難となっていました。このため、悪水の疎通を図ることを目的に浚渫を計画する一方、支川や排水口の合流点を下流側に引上げ、内水河川の水位低下を図ることとしました。しかしながら、第二次世界大戦により多くの事業が中断され、予定通りの進捗をみることはできませんでした。

そして戦後、工事は再開されましたが、その計画は、昭和十八年度以降総体計画へと引き継がれました。

BOOK LAND

高鷲村村制施行九〇周年記念誌
人間ルポ
コブシの村の九〇年
発行高鷲村 定価二千元

昭和六三年に発行の本著は、村制施行九〇周年を記念したもの。モノ言わぬ村の花「コブシ」にかわり、九〇年の歳月を村人の語りにつづった、高鷲村の聞き書きである。今でこそスキーや釣り、アウトドアスポーツなどで多くの観光客を集める高鷲村も、かつては過疎と貧困にあえぐ村。その日の糧さえままならず、村の人々は新天地を求めて、北海道へ、満州へ。その歴史は、まさに日本の開拓の歩みだったといえよう。



そうした先人たちの肉声から、私たちは何を学ぶべきなのだろうか。コブシの咲く村に訪れた九〇年目の春。苦闘の果ての豊かさ、そして幸福をしみじみと問いかけてくる貴重な一冊である。



昭和22年、木曾三川下流域の航空写真（米軍撮影）

特集

木曾川下流改修増補工事

第一編

木曾川下流改修増補工事、その背景

三川分流を実現した木曾三川下流改修や上流域を対象とした大正改修など、大規模な治水事業が実施されながらも、度重なる洪水は木曾三川流域に、大きな被害をもたらしていました。中でも揖斐川では、河床の上昇による内水被害が深刻化、こうした状況下、愛知・三重・岐阜の三県では、治水工事への陳情があいつぎ、昭和十一年から二〇箇年事業として、木曾川下流改修増補工事が施行されることとなりました。

木曾三川下流域の水害状況

明治二〇年に実施された木曾三川分流工事によって、木曾三川下流域の状況は著しく改善されました。続いて大正一〇年度からは木曾川上流改修に着手し、治水上の整備は進められましたが、その間においても大正一〇年、同一四年、昭和七年、昭和十一年と、大きな水害が発生、大規模な治水工事の実施にもかかわらず、明治二〇年から昭和十年までの四十九年間に被害をもたらした洪水は九六回にのぼっています。

そもそも木曾三川下流域は、土地が低平であり、雨水や生活排水などの内水が湛水しやすい、その排除は困難を極めていました。そのため、堤防の溢水や決壊による被害に加え、内水による被害のため左記の表に見られるように、損失は莫大な額に達していました。

木曾川下流増補工事区域洪水被害額

年次	金額(円)				摘要
	愛知県	三重県	岐阜県	計	
大正15年	57,919	30,660	60,519	148,098	
昭和2年	60,375	8,297	56,980	125,652	
〃3年	133,698	14,137	57,819	205,654	
〃4年	264,208	15,249	41,715	321,172	
〃5年	91,349	22,961	102,768	207,078	
〃6年	66,878	115,249	30,305	207,796	
〃7年	248,393	32,032	33,159	313,584	
〃8年	247,796	38,705	93,691	380,192	
〃9年	122,303	201,360	448,144	771,807	最大
〃10年	150,297	82,141	215,065	447,503	
計	1,437,814	560,557	1,140,165	3,138,536	
年平均	143,781	56,056	114,017	313,854	

木曾川下流増補計画以前の木曾川管理

明治四四年、木曾三川下流改修は一応の完成をみましたが、その後の治水上の施設の維持修繕については、旧河川法では、河川管理は地方行政庁において、その管内にかかる部分を行うこととなっていました。

しかし、河川工事によって利害が府県にとどまらない治水上の施設については、主務大臣において管理し、維持修繕できることになりました。

愛知・三重・岐阜という広範な地域に流域を有する木曾三川においても、三県で利害が反する背割堤及びそれに直接関連する護岸・水制・船頭平開門・河口導流堤などの治水上の施設は、内務大臣が直接管理することとし、明治三五年から直接維持工事が始められました。

維持管理区間は、船頭平開門の浚渫及び背割堤・導水堤などの補修や水路維持のための水制の新設、護岸・水制の補修及び水路維持のための浚渫などが対象であり、昭和四〇年からは三箇年継続事業として総工事費六九万円が維持事業を進めることとなりました。



昭和初期の船頭平開門

増補工事実現への地元の動き

こうした維持工事の進捗にもかかわらず、濃尾地震による堤防の地盤沈下や荒廃した山地からの流出土砂により、河床は次第に上昇し、出水被害の原因ともなっていました。

昭和七年七月及び同一年六月の洪水では、木曾川では堤防天端から数二〇mに迫る出水箇所もありましたが、沿川住民の必死の防水活動によりかろうじて堤防の決壊を免れました。

揖斐川においても、大正一〇年七月及び同一年八月の洪水で下流の河幅の狭い箇所では堤防の決壊寸前のところもあり、沿川の低湿地では従来から排水が困難でしたが、河床の上昇により、少しの出水でも自然排水が不可能な惨状に。内水被害も増大していきました。

このような状況に対し岐阜県議会で、昭和四年一月一九日、揖斐川下流の浚渫に関する意見書を議決し、岐阜県知事に提出するとともに、翌五年一月二〇日の県議会においては同一意見書を議決し、内務大臣に提出しています。

さらに昭和七年六月二五日、岐阜県治水協会からの首相、内務大臣及び大蔵大臣あてに揖斐川下流の浚渫及び堤防増築施工に関する陳情書を提出。次いで同年九月一五日の臨時岐阜県議会において、全会一致で三たび揖斐川下流浚渫に関する意見書を議決し、岐阜県議会議長から内務大臣及び岐阜県知事あてに提出しています。

木曾川下流増補計画の概要

木曾三川下流改修(明治改修)は日露戦争の影響で予算が一部削減されたため、木曾川・長良川の堤防の一部は未改修のまま、明治四四年に一応完了となりました。しかし、明治四四年に発生した濃尾地震により砂地沈下や荒廃した山地から流出する土砂によって河床は年々上昇し、このため全川にわたる拡築、河道の掘削を目的として、木曾川下流増補工事は計画されました。

木曾川では鍋田川分派点付近の狭窄部を引堤するとともに鍋田川を締切り、その分派点に越流堤を設けて、木曾川の洪水の一部を分流することとしました。

長良川では三重県立田村福原地内の輪中堤により本川が狭くなっていたため、輪中堤を引堤して河道の拡幅や堤防を拡築することとしました。

木曾川下流増補工事区域

河川名	自	至	距離
木曾川	右岸：岐阜県海津郡東江村 左岸：愛知県海部郡八開村	海	23km
揖斐川	右岸：岐阜県安八郡和合村 左岸：愛知県安八郡結村	海	40km
支川・長良川	右岸：岐阜県海津郡大江村 左岸：愛知県海部郡立田村	揖斐川合流点	11km
合計			74km

計画高水流量

河川名	区間	計画高水流量 (m ³ /sec)
木曾川	上流改修区域から鍋田川分派点に至る	9,700
	鍋田川分派点以下海に至る	8,700
派川鍋田川	全川	1,000
揖斐川	藪川合流点以下牧田川合流点に至る	3,400
	牧田川合流点以下長良川合流点に至る	4,200
	長良川合流点以下海に至る	7,000
支川・長良川	上流改修区域から揖斐川合流点に至る	4,500

木曾川下流増補計画表(当初計画)

節別	単位	数量	金額(円)	節別	単位	数量	金額(円)
本工事費			3,803,600	附帯工事費			267,800
掘削	m ³	8,980,000	2,186,400	道路	m	20,300	30,500
築堤	"	5,870,000	521,200	橋梁	"	1	6,900
護岸	m	17,200	576,000	樋門樋管	"	43	225,000
開門	箇所	1	120,000	水路	m	1,800	5,400
洗堰	"	1	400,000	その他諸費			994,900
用地費			603,700	合計			5,670,000

木曾川下流域の景観

明治以降に設置された木曾川下流域の水制は、動植物にとって良好なワンドを形成し、自然豊かな河川景観を創りだしている。既存の水制を保存・維持を図り、さらに、河川環境を豊かにするために、新たな水制の役割を見直す必要がある。

1. 河川での生態系

明治改修の目的の一つとして舟運の便を図る為の低水工事が行われ、低水路固定のための長大水制(ケレップ水制)が設置された。ここで「ケレップ」とは水割(クリッペン)の意味である。今日このケレップ水制は水制間に土砂を堆積させ草木が繁殖する見事なワンドを形成し、木曾川下流域に豊かな自然景観を創造している。このケレップ水制の上で水鳥が羽を休め、釣り人がワンドに釣り糸を垂れている風景は、まことに心和むものがある。ここで、木曾川の空間利用形態を大別してみると、散策の41%を筆



コアジサシ(小鯉刺)砂原に浅いへこみを作り、木片や枯れ草および貝殻などを少し敷いた巣を作る。

頭に、スポーツ25%、水遊び24%および釣り10%となっており、多くの人が木曾川の自然豊かな景観を楽しみながら散策していることがわかる。このような自然を創造している要因としての動・植物の特徴を見てみよう。魚については、木曾川に生息する魚類の9割近くが下流域で生息しており、淡水産の二枚貝に卵を産み付ける「幻の魚」イタセンパラが生息するなど、水制が創り出したワンドは魚に取ってかっこうのすみかとなっている。一方、植物に関しては、貴重種であるキク科の多年草フジハカマや水位が変動する所に生えるタコノアシ、葉の形が葵に似ているので命名されたミスアオイ等の貴重種も生育している。また木曾川下流域では毎年夏鳥として4月頃に渡来し空中の停止飛行から急降下して水中の小魚を捕えるコアジサシを始め76種類におよぶ鳥が飛来するなど、今後一層、木曾川下流域は水生生物・植物・水鳥などの豊かな河川空間となることが期待される。



フジハカマ 川岸の土手などに生えるキク科の多年草で、秋の七草として親しまれている。

2. ケレップ水制・抗出し水制と自然環境への評価

これまで、堤防・護岸・根固め工事の河川施設は、洪水の外力を考慮して強固なものが多く、生態系や景観への配慮が不足していた。しかし近年の河川工事は、治水上安全で流域の人々が水と親しみ易く、水生生物が生息できる河川工事へと移り変わりつつある。この種の河川工事は、多自然型川づくり(多自然型河川工法)と称され、各種の工事が全国的に行われている。この多自然型川づくりの護岸工法のひとつとして水制を取り上げることができる。水制工は長い歴史を持っており、原始的な水制工はいわゆる古事記、万葉集の時代からまでさかのぼる。安土・桃山時代以降においては現代でも使用されている各種水制工が特に水はねの働きを目的として設置され、地方により名称が異なり構造が各々の河川

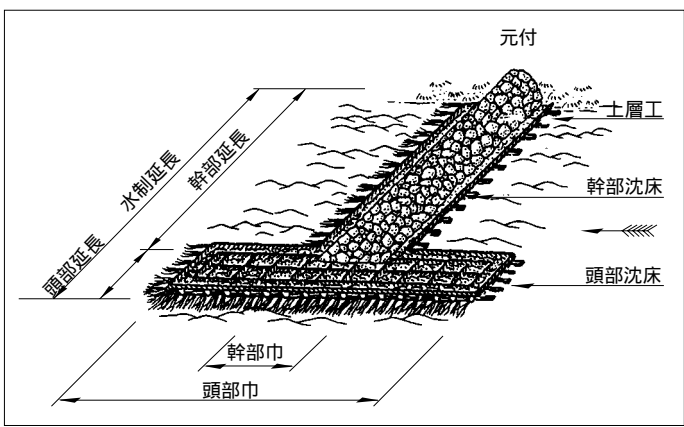


図-1 水制工の構造

久保田 稔先生



略歴
大同工業大学建設工学科教授・工学博士
1971年 岐阜大学大学院工学研究科土木工学専攻終了、その後同大学土木工学科助手。
1977年 大同工業大学建設工学科講師、現在に至る。
研究テーマ
水制に関する実験と数値解析、天竜川の土砂災害、海底パイプラインに作用する流体力に関する研究。

に含ませて経験的に発展してきた。

ここで少し水制の種類と働きにふれてみよう。ケレップ水制などの不透過水制は、堤防の侵食防止や流向を変え、水制間での土砂の堆積を促進させる働きがある。一方、透過水制としては、抗出し水制が良く知られており、抗出し水制による流水への減速効果によって特に洪水時などでの高濃度の浮遊砂を水制周りに早く堆積させる効果がある。

ところでケレップ水制(粗架工法自体がオランダ技師によって我が国に伝えられた工法)は、当時最新の土木技術によって造られたものであり、今日、木曾川下流の美しい景観にとけ込んだ見事な自然を創り出している。一方、透過性の抗出し水制は、水制群として根固め機能の強化を図るために、ケレップ水制の前後に設置された。昭和56年の調査によると、これら不透過ケレップ・透過水制の本数は明治改修時の約倍に増えている。

写真3は、木曾川右岸16Km地点からのケレップ水制であり、水制間に堆積した土砂には草木が繁殖しており、良好なワンドが形成されている。水制が創り出しているこのような景観は、季節だけでなく一日の干満によっても大きくことなり、さらに夕暮れ時の風景は一幅の名画のようである。



木曾川右岸16Km地点付近のケレップ水制と抗出し水制

3. 多自然型川づくりの今後の課題

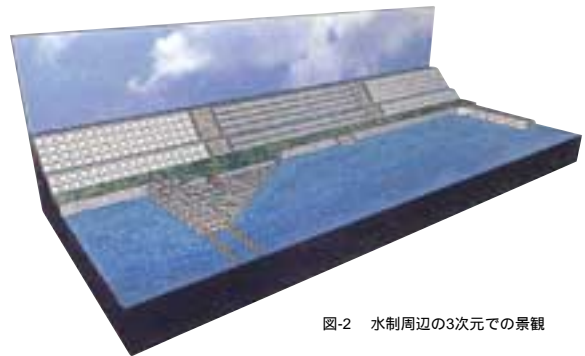


図-2 水制周辺の3次元での景観

この新緑の頃、私たちは山に茂っている青々とした若葉を見て、「自然」を満喫している。ところで、山の樹木のほとんどは「植林」されており、私たちは「よく整備・管理された状態」での「自然」を満喫していると云えよう。

河川においても同様であり、「よく整備・管理された状態」での「自然」を河川工法に取り入れる為に、我々が日常珍しくもなく見過ごしている植物、水生生物・動物および水鳥などの多くのものへの配慮が近年払われている様である。

さて、当時最新の技術で健造されたケレップ水制もほぼ一世紀を経て河川景観の一部としてとけこんでいる。一方、最近行われる河川工事には、施工した直後に「自然」な状態となっていることを、知らず知らず期待している事例があるようだが、流水の働きをよく理解し、一世紀とは言わないがせめて数年後に自然とけ合つまで待つよりも必要であろう。以下に、水制を

設置する際の一例を取り上げよう。

最近の高性能なパソコンの普及により、複雑で膨大な計算量が必要とする水の流れを比較的簡単に予測することが可能となってきた。一例であるが、図2は、3次元CGで表現した水制周辺の景観である。この水制では、高水敷幅を運動ケラントの様に一定幅とはせず、水制下流側に満潮時には水中に没する三角形断面を高水敷の中央部近くまで進入させ、高水敷に変化を付けるとともに、不透過水制先端部に抗出し水制を取り付け、水制間での土砂の堆積を期待している。図3は、3次元CGによって描いた水制周りの時間平均での流れの状況を現した1計算例であり、水は左から右に流れている。水制上方の黒い点は抗出し水制であり水制後方の破線は逆流を示している。数値計算では、不透過水制背後で発生する逆流や水制間へ流入する流れの状況を時々刻々に再現する事および水制を上流や下流に傾けて設置角度の異なる水制間での流れの状況を予想する事が可能である。この例のように、現在は河川景観をも含む対象構造物を3次元CGで表現し、対象構造物の最適な形状を数値解析で予測することがある程度は可能となっている。

ところが、無論計算機は万能ではなく、水制周りの複雑な流水の状況、例えば流水が水制上を越流している場合を再現することは、現段階では不可能であり、また、水制による土砂の洗掘・堆積状況を計算に取り入れるのも困難である。つまり現段階では、数値解析によって出来る限り最適な設計を

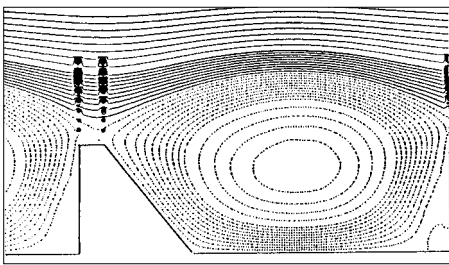


図-3 数値計算による、水制周りの流れの状況(時間平均)

行い、その後は、川自体の働きに期待する必要がある。ただ、明治時代と大きく異なる点は、現在の河川工学の知識により、ある程度は数年後の土砂堆積状況を予測することが可能な点である。

4. 自然環境・自然景観の創造への水制の活用

水制工は前述のように長い歴史を持っており、各河川毎に、試行錯誤的に水制工が改良され発達してきた。ところで戦後、建設機械の大型化および河岸処理に対するコンクリート構造物の多用化さらに水制自体の流水への物理学的働きの不明確性と河岸保護に対する水制の間接的な働きのために、昭和30年代以降から余り水制工は行われなくなってきた。最近、多自然型川づくりの工法として再び水制工が着目され始めている。

多自然型川づくりが声高に叫ばれている現在こそ、もう一度先輩技術者による英知の結晶の一つである水制の多様な働きを良く理解し、河川景観や水生生物等の良好なワンドを創造する水制を保存・維持することともに、数年後に「自然」と融合することを期待して新たな水制を設置することが、今後の多自然型川づくりの一つの出発点となるものと考えられる。

参考文献

- 「木曾川の治水史を語る」
- 木曾川上流工事事務所
- 「木曾三川」その流域と河川技術」建設省中部地方建設局
- 「日本の水制」
- 山本晃一
- 「土木主要録」
- 青木國夫、飯田賢一他編
- 「河川水辺の国勢調査」
- RIVERFRONT
- 人と自然にやさしい川づくり」
- リバーフロント設備センター

民話の小箱

郡上谷

むかし、むかしの夏のことじゃ。

六月の中頃からかんかんした日照りが続いていたの。

村の衆がいくち真剣に雨乞いしても曇りもつわかず、

田んぼは言いつにおよばんことじゃが、

野山の草木までしなびてしまつての。

川まで枯れてしまつてありさまじゃ。

そんなあばいじゃつたもんでの。

長良川の真中へんやすつと下の仰山人の住んでるやうなとこには、

水飢饉を通り越してそりやびい大騒動じゃつたことじゃがの。

それでも川上の方からちよるちよる水が流れてきまつもたじやで、

「何処から流れてくるんじや」と

「山の何処かに水が湧いて出る所があるに違いない」

村の衆は暑い暑い、はくらのせるようなかんかん照りの中を

ぞろぞろ手桶をひつさけて川づたいに

飲み水探しにのぼつてきつたんじやげな。

「まだ上じや。まだ上じや。」

そつ言つてのぼつてきよるつちの。

長良川本流と切立川の出会いの所まででしつたんじや。

どつも、本流より切立川の方が余計にじめつとよつな

かつに見えたもんじやで。

「間違いのつちの方じや。」

そしたら案の定、槍ヶ淵と手斧ヶ淵にの。

そりや手の切れるような清水がこんこんと

湧きながらたまつたんじやそつじや。

「じやありがたじつちや。」「これも神仏のお導き。

やれやれ、おかげさまで救われた。助かった」

村の衆はがぶがぶがぶがぶ、それこそ胃袋がはちまかれるほど

飲まつせたといつちがの。

その話が、ぱあつと郡上じゆつに広がつたもんじやで、

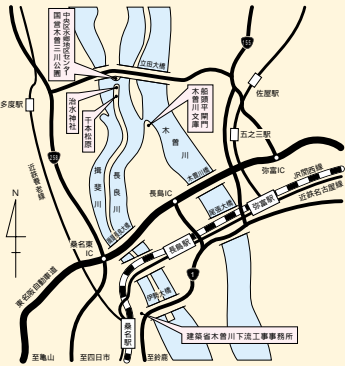
「おりもおりも」と、みんな連なつて谷まで水を飲みにしつたげな。

そんなわけで、「この谷を郡上谷と呼ぶやうになつたんじや

とつちを聞いてくるがの。」



木曾川文庫利用案内



- 《開館時間》午前9時～午後4時30分
- 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》無料
- 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立木村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

アンケート調査実施にあたりまして、多大なご協力をいただき、誠にありがとうございます。お叱りの声、お誉めの言葉、励ましのエールなど、どのご意見も私も編集スタッフのかけがえのない財産となりました。こうしたご意見を参考に、ますます愛される機関誌づくりをめざす所でございます。

Vol.23にあたっては高鷲村役場ならびに久保田稔先生にご協力をいただきました。ありがとうございました。

次回は愛知県立木村を特集します。ご期待ください。

表紙写真

上:上野開拓記念碑

下左:牧歌の里を代表する花の女王ラベンダー

下右:長良川源流